

伝え

日本口承文芸学会 会報

【伝え】第21号 1997年9月

発行 日本口承文芸学会

〒150東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部 伝承文学研究室内

☎03-5466-0224

日本口承文芸学会大会報告

1997（平成9）年度の第21回大会は、6月7日（土）～8日（日）の2日にわたり、静岡県の常葉学園短期大学を会場として開催された。

..... 公開講演

石川純一郎「祭りと民俗芸能
－静岡県における御船歌の展開－」
報告 立石 憲利

小澤俊夫「ヴィルヘルム・グリムの
再話法－同時代人との比較の中で－」
報告 間宮 史子

石川氏は、静岡県内の多くの民俗芸能の紹介と船祭りや歌われる御船歌の調査・研究の結果について話され、大きな刺激をうけた。

現地での調査にもとづく講演は、あらためて現地調査の大切さを教えてくれたものであった。そして、これだけの調査は大変だったろうなと思うと同時に、楽しかったろうなと、うらやましささえ感じたものである。

口承文芸に視点をのこした祭りや民俗芸能の調査・研究は、まだ少ない。私の住んでいる岡山県でも、ほとんど手がついていないのが実態だ。例えば、邑久郡牛窓町で秋祭りに曳かれるダンジリ（曳き船）は、文化財に指定されているが、ダンジリ歌（御船歌）は文化財指定の際にも記録さえされていないというのが実態である。歌を忘れたカナリアだ。

石川氏は祭りや民俗芸能をビデオ化（映像化）していると話されたが、このことも重要だと思う。岡山民俗学会でも、現在、ビデオシリーズ「岡山の祭りや芸能」（全十八巻）を作成中（既刊八巻、来年度で完結予定）であり、それに従事していることもあって、大きな関心をもって聞いた。ビデオ製作をおこなってみて、多くの祭りや芸能が消え去り、消え去ろうとしている実態を知った。口承文芸に視点をのこした調査を含め、早急な調査・研究を痛感したところだ。（岡山県）

小澤俊夫氏は近年、昔話内部の研究－特に語り口や話の構成といった様式研究－の必要性を訴え、それをふまえて本来口伝えされてきた昔話を次世代に伝えることに努めている。伝承の語り口が減少し、人々が昔話にふれるのは本の中がほとんどという現在の状況においては、「昔話をいかなる形で本に収めるか、ということが重要問題になってきた」。その際参考になるのは、ひとつには、グリム兄弟、特に弟ヴィルヘルムの再話法である。

その再話の特徴を同時代人との比較の中で明らかにするために、小澤氏は例として、白雪姫が女王に殺されて生き返る場面をとりあげて説明した。グリム兄弟と同名のアルベルト・グリムの「白雪姫」では、姫はイチジクに入れられた毒の苦しみで死に、こびとの王の呪力で生き返る。これに対して、グリム兄弟の白雪姫はひも、くし、リンゴで3回殺されるが、それらが除かれると生き返る。つまり、毒が効いていたのではなく、それぞれの物が白雪姫の姿を凶形として邪魔していたのであり、それらが除去されると姫は回復する。

口伝えの昔話には、その語り口に一定の法則がある。グリム兄弟の例中の「3回の繰り返し」や「凶形的に語る」というのもその特徴のひとつである。昔話の様式論は、20世紀半ばにマックス・リュティによって確立されたが、それ以前にグリム兄弟は、昔話の語り口の特徴を感じとって再話していたのだ。彼らはその意味で、「消えていく昔話を本の中に入れて救った」のであり、その再話法は、昔話を本に収めるときの手本となりうると小澤氏は説く。（東京都）

第21回大会研究発表（6月8日）
第一会場報告

川森 博司

第一会場では、四つの研究発表がおこなわれた。

まず、「金太郎と民間説話」で鈴木菜穂氏は、金太郎は山姥の子であるという形で伝承されていることに焦点を当てた分析をおこなった。自身の調査資料を中心とした日本各地の金太郎伝承の着実な整理にもとづいて、山姥には恐怖の対象としての側面と豊饒性を示す側面があり、それがどのような比率であらわれるかによって、金太郎伝承のさまざまなヴァリエーションが生じていることを、説得的な形で示した。

次の「世間話の形態」で大石和世氏は、ダンスの理論の検討を中心に、これまでの説話の形態論的分析の有効性とその欠陥を示し、「河童との出会い」を主題とする世間話の実例に即して、改良したモデルに基づいた分析を示した。これまで十分な概念の整理がなされないままに受容されてきた理論的モデルについて、日本の伝承例を分析するための道具としての見直しをつけようとした意欲的な発表であった。

続く川島秀一氏の「ムラの歴史を語ること－仙台藩入谷村の〈郷土誌〉の発生－」は、口承の世界と書承の世界のダイナミックな関係を実証的な資料によって描き出した斬新な発表であった。これらの「郷土誌」は「～物語」と表記されており、そのなかには今日の概念でいえば「伝説」にあたるものも多く含まれている。村には歴史の語り手がいて、彼らのところで口承の歴史と書物による歴史が交錯している様相を説得的に示してくれた。

最後の「対馬の神功皇后説話」で岡田啓助氏は、対馬の各地の神功皇后の伝承、特に神功皇后説話と関わる神社の資料を詳細に分析して、神功皇后の新羅遠征説話が対馬神道の骨格となっている様相を示した。そして、これらの伝承に、国境に位置する対馬の人々の意識の反映を見る視点を示した。

以上のように、各発表とも、丹念な資料分析を土台にしつつ、今後の議論の展開へ向けての新たな視点を、そのなかにも含むものであった。（大阪府）

第21回大会研究発表（6月8日）
第二会場報告

斎藤 君子

大嶋善孝氏の「漁民の伝えた致富譚－蛸長者の昔話」では、話の分布が日本海沿岸から瀬戸内海沿岸に集中していることと、主人公の職業が漁民であることから、漁民や船乗りの中で伝承され、運搬されたとみる。話の成立の背景には、江戸時代の海上交通の発達と、庶民の間での社寺参詣の盛行があるとす。また、この昔話と「炭焼き長者」との間には、深い関連が認められるとし、「蛸長者」が「炭焼き長者」の主人公を炭焼きから蛸取りに変換させたものとして位置づけた。

「日本における〈太陽を射る話〉について」で山田仁史氏は、日本には「太陽を射るモグラ」と「3本足のカラス」の二つの話型があることを指摘した。前者の類話14例は中国地方と九州に分布する。国外ではモンゴル、北米、北東インドに類話があり、日本の話と共通する内容をもつ。後者は、話の分布が弓神事の分布と一致し、山の神信仰や鳥勸請、弓祭などとのつながりが認められる。古代中国には、太陽の中に3本足のカラスが棲むという観念があり、それがわが国に伝わり山の神信仰と結びついたとみる。

繁原央氏は「浦島と竹取－仙界淹留と天人流謫の構造」において、浦島説話は8世紀初頭に、古代インドや中国の天人流謫譚に精通したわが国の知識人が日本の民間伝承を利用して創作した、日本版天人流謫であるとする高橋宣勝氏の仮説を採用すると共に、「浦島」と「竹取」の構造を比べ、両者が2項対立の関係にあるとみなす。これらのことから、「竹取物語」の作者が「浦島子物語」をみて、物語を逆転させることによってかぐや姫の物語を生み出したと主張した。

水野知昭氏の「北欧教会建立伝説の成立背景」では、「大工と鬼六」が北欧の教会伝説の翻案であるとする高橋宣勝氏と桜井美紀氏の説から出発し、北欧の教会建立伝説そのものの起源を北欧の築城神話やギリシャの築城神話に溯るとする。これらの築城神話と共通するモチーフを列挙し、これが民話のレベルでは多彩な変化を見せることから、神話の方が民話に先行するものとみなした。（埼玉県）

第21回大会シンポジウム（6月8日）

シンポジウムに参加して

花部 英雄

「口承文芸と民俗芸能」というのは、いかにも古色然とし、かつ茫漠としたテーマである。この大物をいかに料理し、ご馳走にしてくれるのか、いくぶんの興味を持って臨んだ。最初に小池淳一氏から、テーマの設定意義の説明があった。テーマが抱えている課題を八つに整理し、そのうち「芸能・祭礼の起源、由来を語る説話」「民俗芸能の解釈、見立ての言説」に中心をおいた、シンポジウムを組み立てる意図の前口上があって、三氏の報告が続いた。一番目の小池氏の「はじまりのはなし」は、陰陽道将来説話が他の芸能・宗教との接触、排斥を通じて、一つの芸能へと胎動する相^{すがた}を示し、そしてその推進に、説話を保持する陰陽道（師）の力があったことを述べた。続く斎藤英喜氏の「いざなぎ流の祭文と神学」は、高知県物部村のいざなぎ流の祭文（「天神の祭文」）を太夫の視点からとらえ、その祭文の場での意味や法文との関わりを分析した。三番目の松尾恒一氏の「延年芸の説話－中世寺院の芸能表現－」は、延年芸における口承的な部分である声、口伝、説話を取り上げて解説を加え、口承文芸の地盤としての意義を見いだそうとした。三者の報告は、ともすれば口承文芸の領域を限定し、タコツボ的になりがちな研究状況に対して、芸能、祭祀のことば（説話）・声がもつ口承的性格を拡大してみせてくれた。それぞれの研究分野と接触する口承文芸の部分を腐心し、またサービス（映像、音声機器を利用）して取り上げてくれた。その意味では十分に示唆的で学ぶものがあった。ただ総じていえば、やはり地盤的、周縁的部分での接点だけで、口承文芸の本質に届かずに終わった印象をぬぐえない。しかしそれが芸能と口承文芸の現実的な姿なのだと、皮相的にとらえるべきではないだろう。最初の問題提起の説明からして、このテーマは多くの課題を内包しているものであり、今後個々の問題点を現実的に処理していく方法の模索が必要であろう。蛇足を加えるなら、次にはウエートを口承文芸研究の立場においた問題追究の必要性も感じた。（神奈川県）

第33回研究例会発表報告（97年3月15日）

遠藤庄治氏「沖縄の普天間権現信仰」
梶田純子氏「屋号伝承について」

根岸 英之

遠藤氏の発表は、沖縄県宣野湾市にある普天間権現に関する説話を、信仰とのかかわりから論じたもの。まず普天間権現由来伝説の主要話型として、「航海神」「普天間権現由来」「松にシブ草」「地名由来」「片目の蛇・竜」「蛇婿入」「ハブになった刀」「嵐参詣」「煙草由来」「身売り救い」「大城中村家の黄金」「東恩納当と普天間権現」「妊婦の禁」を挙げる。次いで、この話型に見られる主要モチーフを「機織り聖処女モチーフ」「蛇婿入モチーフ」「航海神モチーフ」「祖神伝承」「乗瀬御嶽由来」「安里のティラ」に分け、関連する沖縄各地の伝承を示した。普天間権現説話は、沖縄全域に多様な話型をもって伝えられており、その背景として、9月の例大祭前後に行われる普天間権現を含む参詣の広がりを見せられた。いつの間にか、豊富な資料を提示しての力強い発表であった。

梶田氏の発表は屋号についての研究視点を総括的に論じたもの。屋号について、「姓の他に自家と他家とを区別するため、屋敷を含めた<家>に対する呼称語」と定義し、その機能について、「同姓が多い集落で、家と家を区別する」「ムラでの地理的位置・家格・本分家関係・生業などを表す」「ムラの仲間意識を象徴する」などを挙げる。研究課題としては、「例外もあるが伝承衰退が激しいので、調査を急ぐ必要がある」「プライバシーの問題」「小字との関係が深いはこちらも伝承衰退が激しい」「屋号のみを調査しても、命名理由やまつわる話も記録しないと、機能などが明確にならない」「記録する際の表記の問題（漢字にするか、表音を優先するか）」「家印・あだ名を含めるか」といった点を指摘。

機能や屋号の分類などやや整理が必要な点も見られ、また具体的地域を例にした考察も聞きたかったが、全般に興味深い発表であった。梶田氏は会員ではないが、例会担当者には、屋号を口承文芸研究の立場から深化させようとする意図があったものと察せられる。屋号伝承に関心を持つ報告者には、いい刺激となった例会であった。（千葉県）

新刊紹介

- (書名／編著者／発行所／発行年)
- ・『昔話の源流』(稲田浩二、三弥井書店、1997. 1)
 - ・『岩波講座日本文学史』第17巻－口承文学2・アイヌ文学－(岩波書店、1997. 3)
 - ・『うわさと俗信』(常光徹、高知新聞社、1997. 3)
 - ・『遠野物語りは生きている－白幡ミヨンの語り』(吉川裕子、岩田書院、1997. 4)
 - ・『子どものフォークロア－その異人ぶり』(武田正、岩田書院、1997. 5)
 - ・『太陽と月と星の民話』(日本民話の会・外国民話研究会、三弥井書店、1997. 6)
 - ・『昔話と呪物・呪宝』昔話－研究と資料－第25号(日本昔話学会、三弥井書店、1997. 7)
 - ・『絵と語りから物語を読む』(石井正己、大修館書店、1997. 9)

受贈書リスト

- ・『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集、第71集(国立歴史民俗博物館、'97.1 '97.3)
- ・『歴史民俗資料学研究』第2号(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、'97.2)
- ・『日本民俗学』209号～211号(日本民俗学会、'97.2～'97.8)
- ・『八重九郎の伝承』(5)(北海道文化財保護協会、'97.3)
- ・『甲南国文』第44号(甲南女子大学国文学会、'97.3)
- ・『ながのはらまち むかしばなし』(長野原町、'97.3)
- ・『長野原町の昔ばなし』(長野原町、'97.3)
- ・『平成8年度 共同研究報告書』(国文学研究資料館、'97.6)

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金1000円 年会費4000円

入会申込書請求先：〒150 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 TEL03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof.J.Nomura,Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

*口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆編集担当は、米屋陽一・常光徹です。